



一 対決

以前より怪しげだった人間界と魔界の境界がとうとう開いてしまった。

英名の誉れ高い国王はただちに人間界最強の勇者ユリとその婚約者でもある賢者ナナに勅命を下した。

「侵入した魔族を掃討せよ」と。

すぐさまユリはナナとともに、開いてしまった魔界の門へと走った。

「なんだよ、こいつら…」

勇者ユリは思わずそうつぶやいた。

魔界の門は怪しげな紫色の霧の中にあっただ。

湧き出してくる異形のものたち。

これまで見たことがない、それでいて確実に生理的嫌悪感を催させるその外貌。

しかし、どことなく線は細く、力強さは感じられない。

「三下だな。やれそうだ」

勇者ユリは賢者ナナの方を向いて、そう微笑んだ。

その刹那。

邪悪な異形の魔物の、さして頑丈とも思われない顎の部分から、何かが伸びた。

虚空に銀色の弧を描くそれは、猫の髭のようにも見えた。

空中を頼りなげに、風に煽られるようにしながら飛んできたそれが、勇者ユリの肩に触れる。

「ぐわっ」

力なく肩に触れた細い触手は、そのまま肩から滑り落ちるはずだった。

だが、触手が触れたその直後に、勇者ユリは肩を押さえてうずくまったのだ。

「なんて力だ…」

巨大なハンマーで力の限り殴られたような衝撃を、勇者ユリは感じた。

「危ない！」

賢者ナナは倒れたユリに第二撃を加えようとする触手に炎の魔弾を放ち、同時に勇者の肩に治癒の呪文を放った。

賢者と呼ばれる彼女にしかできない業である。

彼女はまだ年若いながらも攻撃魔法・治癒の魔法の両方を極め、同じ時代には世界にただ一人と定められた「賢者」の称号を帯びたものである。

魔法だけでなく武術にも優れ、素手での立ち会いでなら勇者ユリにも遅れを取らない。

しかし武器を取って戦った時の勇者の強さを、彼女は認めていた。

もちろん、彼女の強さも、勇者は認めている。

互いの敬意が男女の愛情へと変わり、賢者は勇者にその純潔を捧げた。

以後、二人はかけがえのないパートナーとして、幾多の戦場を駆け抜けてきたのだ。

賢者の治癒の魔法によって力を回復した勇者が、聖剣を構え直す。

「やや油断があったようだ。俺もまだまだ修行が足りない」

聖剣の切っ先を頭上まっすぐに掲げ、静かに目を閉じる。

それは同時に、賢者ナナに、ありったけの魔力をこの剣先にぶつけよ、という合図でもあった。

「獅子は兎を倒すのにも全力を奮う！」

勇者の目が見開かれ、聖剣の刀身を賢者ナナの放った魔法の炎が包む。

勇者は魔法の炎を、己の肉体から放射されたオーラと混ぜる。

そのままばゆい光体となった勇者は、魔獣に体当たりするとともに、気合い一閃、力の限り聖剣を振り下ろした。

断末魔の悲鳴とともに、真つ二つになった魔獣が倒れる。

勇者ナナは倒れた魔獣のさらに先を見据え、頬にかすかにかかった魔獣の体液を、手の甲で拭った。

「そうだ…俺は…俺たちは何者にも負けはしない！」
と、その時。

勇者は視線の先に、紫の霧に覆われた何者かがいるのに気がついた。

先程の魔物のような、禍々しい気に包まれてはいない。

ゆっくりと霧が晴れていく。

そこにいたのは、一人の少女のように見えた。

さほど大きな体格ではない。

ごく普通の、女性としては中肉中背といったところだ。

地味なローブに身を包み、威圧感を感じられない。

さらに霧は晴れていき、少女の表情も見えるようになってきた。

金色の髪。

大きな目、細くはつきりとした眉。

きりつと結ばれた小さい口。

全体としてはこの上ない美女に見えるが、それでいて嫌味は感じさせない。あたたかみというか、人格の美しさが、どことはなしににじみ出ているような、そんな顔なのだ。

勇者はぼかんと口を開け、美女を見つめていた。

魔獣の背後にいた、ということ、彼女はどうかやら魔獣の主というべき立場にあるのだろうか。

だが、まったく悪人には見えない。

少女が微かに笑った。勇者も、思わず口元を緩めてしまった。

「そなたが、人間界最強の男か」

「俺のことを知っているのか」

間接的に、勇者は少女の問いに「そうだ」と答えていた。

少女はさらにはつきりと笑ったが、その表情には濃い失望の色が浮かんでいた。

「そうか…あれで最強なのか…」

「あれで、だと？」

勇者は聖剣の柄をぐっと握りしめた。人のよさそうな美女だと思ったが、なんてことを言いやがる。

「たった今魔獣を倒したところを見ただろう。人間の世界にはあれほど強い魔物はいなかった」

「そうか…それほどムキになって言うのなら、そなたの言う通りなのだろうな」

少女は言葉が続ける。

「だがな…あれより弱い魔獣は、魔界には滅多におらぬのだ」

勇者の顔色が変わった。が、少女はそれを見ようとせず、はっとした表情になって「ああ」と呟いた。

「失礼をした。まだ名乗ってなかったな」

「名乗らなかつた無礼も、魔獣の瘴気にあたつて錯乱した小娘の戯言とともに許そう」

勇者は剣を鞘に収めながら言った。そう。人間界最強の存在は、誰に対しても寛容でなければならぬのだ。

「妾の名はグリヌボス・アラキレト。そなたたちの世界では、いわゆる魔王と呼ばれている存在じゃ」

「魔王？」

「そう」

グリヌボスと名乗った少女は、静かに微笑む。

その横顔には、侵しようなない威厳がたたえられていた。

勇者は直感的に「こいつは嘘を言っていない」と確信した。

「今一度、問おう」

勇者は聖剣の柄を握り直して、言った。

「魔王だと名乗ったが、それは真実か」

「そうじゃ」

魔王は薄く微笑んだ。

「ならば！」

勇者は聖剣を引き抜き、頭上に掲げる。そして「ナナ！」と叫んだ。

背後に控えていた賢者ナナが、ユリの叫びに呼応する。

ナナは両腕を大きく広げ、大気の精霊に呼びかけ、あらん限りの魔力を集め、勇者ユリの聖剣へと放った。

勇者の肉体が、再びまばゆい光体となる。

人間界の魔物ならば、よほど凶悪なものでない限り、勇者の放つ気によって、その肉体を消し飛ばされてしまっていただろう。

だが「魔王」は動じない。
彼女はただ、寂しそうな一瞥を、勇者に向けたただけだった。
ただ、それだけであった。
しかしそれが勇者のまとった魔力をすべて消し去っていた。
背後にいた賢者ナナは、悲鳴もあげずにその場に昏倒した。
勇者ユリも、がっくりとその場に膝をつく。
彼は聖剣を地面へと突き立て、それを杖として何とか魔王の視線の力に抗おうとした。
しかし、頼りにしていた聖剣は、一瞬でぼろぼろとなり朽ちてしまった。
支えを失った勇者の上半体は、前のめりに倒れる。
勇者ユリの意識が、ふうっと消えていく。
ユリは自分が、底のない暗闇の中に落ちていくのを感じた。
「失望した」という魔王の声を聞きながら……。

二 喪失

勇者ユリが意識を取り戻した時、彼は自分が見知らぬ城の広間にいることに気づいた。

「目覚めたか。お前のかぼそい意識を吹き飛ばしてしまわぬよう、力の加減に苦労したぞ」
聞き覚えのある声に、はっとなって勇者は、その声の方向に顔を向けた。

木製の大きな椅子がある。

質素だが威厳のあるそれは、「玉座」という名がふさわしいものだった。

その玉座に、一人の女が座っている。

魔王グリヌボス・アラキレト。

出会った時の質素なローブを脱ぎ、胸と腰をわずかな黒い布で覆っただけの姿だ。

手には長く黒いレースの手袋。

脚にも同じく長く黒い靴下。

脚を組み、肘を玉座にかけ、顎を手の上において、勇者を見下ろしている。

その侮蔑を含んだ眼差しに誇りを傷つけられた勇者は、立ち上がるうとした。

「この生意気な小娘の頬を張ってやる！」

そう思った次の瞬間、勇者は自分の下半身に重い鎖が巻きつけられているのに気がついた。
よく見ると腰枷、足枷である。

手も背中に回され、手枷を嵌められていた。勇者は尻もちをついて広間の床に仰向けになった。

魔王の背後で、何者かが立ち上がった。

ゆっくりとこちらに近づいてくる。

「…！」

倒れた自分の数歩先まで近づいた時、勇者はそれが自分のパートナー・賢者ナナであったことに気づいた。

魔王同様、肌の露出の多い格好をしている。

ただ胸と腰を覆う布、手袋、靴下のいずれもが白であり、魔王のいでたちと好対照をなしていた。

「自分がどういう格好をしているかわかる？ みつともないことこの上ないわ」

ナナがそう言った時、ユリはそれが自分にかけられた言葉だとはわからなかった。

きよとんとした後、はっとなってナナを見た。

ナナはユリに、氷よりも冷たい視線を投げかけてくる。

ユリの背筋に、ぞくりと冷たいものが走った。

それまでの人生で、味わったことのない、不思議な感覚。

「こ、これは…なんだ…？」

だがその感覚について深く考える前に、魔王の言葉が投げかけられる。

「ごくごく弱い洗脳をそなたら二人に施したのだが…そうかそなたは独力で解いたか」

魔王も静かに勇者の足元へと近づいてくる。

その股間の中央の、うっすらとした窪みに、勇者の目はいつしか引き寄せられていた。

「ほう」

ユリの視線に気づいたのか、魔王はユリを見下ろして言った。

「妾に対して淫欲を抱くか」

「だ、誰がお前なぞに：お、俺は男だ：男としての誇りがある…」

しかし勇者の声はぶるぶると震えていた。

視線は魔王の股間と、胸との間を行ったり来たりする。

「どこを見ておるのじゃろうのう、こやつは…」

魔王は賢者ナナの方を見た。

「不遜にも魔王さまのお体を見つめているようでございます」

ナナはうやうやしく答えた。

「こやつ、おぬしの恋人ではなかったのか？ 見るのならば、妾の身体ではなくそなたの

身体を見るのが筋であろう」

「わたくしなどより魔王さまの方がずっとお美しいので、やむを得ないことかと存じます」

「ふむ：しかし汚れた男の視線を浴び続けるのも、あまり心地のよいことではないのう」

「左様でございますわね：では、この男に罰を与えるというのはいかががでしょうか」

「罰とな？」

「自分が男として、どれだけ罪深いものであるかを思い知らせ、身体に刻み込むのでございます」

「ふむ：それは一興よのう」
魔王の均整の取れた脚が軽く宙に浮き、勇者ユリの股間のイチモツの上にそっと重ねられる。

重ねた瞬間、グリヌボスの足にぐっと力が加えられる。

鈍い痛みが、勇者ユリの下半身を貫く。

「ぐわあああっ」

ユリは目を剥いて叫んだ。

「あらあら大げさな。そこは一番痛みを感じる場所ではないでしょうに」

賢者ナナであった女が言う。

「ふむ：さすがは賢者と呼ばれた女。男が一番痛みを感じる場所を知っていると見える」

「グリさまはご存知ありませんの？」

グリさま、と呼ばれた魔王はくすりといたずらっぽく笑った。

「知らぬ」

「では教えて差し上げましょう」

賢者ナナが足を上げる。女の足にはかかとの尖った赤い靴が穿かされていた。そのかかとで、ナナは器用にユリの下腹部を覆っていた布を取り去る。

だらんとした陰茎と、睾丸が露出された。

陰茎は半ば勃起し、虫のようにびくびくと蠕動している。

陰囊はかすかに収縮し、また戻るといいうのを繰り返していた。まるで何かを期待しているかのように。

「妾が踏んだのは、これだったわけじゃが」

グリヌボスがつま先で陰茎を軽く蹴飛ばす。

「それは男の快楽の源でございます。ほら、蹴られて悦んでおりますわ。あさましい」
下腹にべたりと張り付いていた勇者の陰茎が、ほんの少し宙に浮いた。

「これは悦んでいる状態というわけか」

グリヌボスは面白そうに陰茎を蹴り続ける。

「グリ様それでは罰にはなりませんわ」

「ふむ：面白いのでつい続けてしまったが：そうじゃの、罰を与えるんじゃったの」

「御意にございます」

「では改めて聞くが、罰を与えるにはどのようにせいと？」

「そうですね」

ナナが足を高く上げた。

そのまま、力を込めてユリの睾丸の上に、「ダン！」という音を立てながら下ろす。

ユリの充血した目と、舌が飛び出しそうになる。

だがナナはその表情に目もくれず、ぐりぐりとユリの睾丸を踏みにじった。

ユリは苦悶の表情を浮かべ、さらに目を充血させ舌を突き出したが、その喉から声は出なかった。

「ほほう」

魔王は興味深げに、ナナの足で踏みにじられる睾丸を見ている。

「なるほどここは、男にとつては苦痛の源であるようじゃな」

魔王はしゃがみ込み、ユリの睾丸を手を取ってしげしげと見つめた。

「グリさま、慈悲深いにも程がありますわ。そうやって優しく撫でるとこの男はまた増長してしまいます」

「増長：とな」

「左様でございます。こやつはこのような惨めなものをぶら下げた汚らしい男でありながら、こともあろうに魔王グリヌボス様と同等以上の力を持つなどと自惚れたのでございますよ」

「実際には、子供と大人以上の差があったわけじゃがな」

「いいえさらにもっともっと大きな差がございました。最強の存在に対して己を同等と考える罪：これはしつかりと罰しなければなりません」

「最強：いや妾はそれほど自惚れてはおらぬ。確かに今魔界におる者たちの中では最も大きな力を持つてはいるが、妾を超える存在がいたことは知っているし、それらに対する敬

意も失ってはおらぬ」

「なんと謙虚でお優しいグリさま」

「自分よりも強いものに対する敬意を失わないこと…それが自らを高める源泉となる。そう考えれば、自分より強いものなどいないと自惚れたこやつには、罰を与える必要がある。そうじゃな」

「御意」

「なるほど…では気は進まぬが、罰を与えるところでしょうか」

魔王はそう言うと、細くしなやかな指で、ユリの鞆丸をつまんだ。



軽く握られているだけのはずなのに、万力で締め付けられているような圧迫感と苦痛を、ユリは味わった。

脂汗が流れる。

両脚が収縮し、電極を押し付けられたカエルのようにびくびくと震える。

「ふむ…」

魔王がさらに、指に力を込める。

ぷちつと小さな音がして、勇者ユリの睾丸は、血の霧になった。

ユリはカメレオンのように舌を突き出し、血の混じった泡を噴く。

だがその陰茎は、白濁した液体を噴出させていた。

「はて」

魔王は首をかしげた。

「苦痛を与えたはずなのに、こやつはどうも悦んでおるようじゃ」

「それもまた男という浅ましい存在であるがゆえの業でありましょう」

「ふむ…業、かの」

「わたくしがもう片方の業の根源を消してやりましょう」

賢者であった女は、血にまみれた勇者の下腹部に手を伸ばした。

そのまま、残ったもう片方の睾丸を指でつまむ。

無造作に力が込められ、こちらの睾丸も血の霧になった。

同時に、勇者ユリの陰茎から、恐らく「男」として最後の精液が射出され、ユリの腹から胸にかけて撒き散らされた。

その量は、明らかにユリのこれまでの射精経験の中でも最大だった。

睾丸を両方ともに潰された痛みにも、ユリは気を失いかける。が、ナナはユリのこめかみのあたりを、靴の尖ったかかとで蹴りつけた。

「楽にはさせないわ」

残酷な笑みを浮かべ、ユリを睨みつける。

「これ、もうよかろう」

魔王が言う。

「汚らしい男の欲望の根源は消えた。罰は与えられたのじゃ。妾は今度は、こやつに祝福を与えようと思う」

魔王は、軽く手のひらを躍らせるように、二度三度と振った。

「女体変換の魔法をかけた」

グリが無邪気な笑顔を向けてくる。

「胸が膨らみ、骨盤が変形して行くのがわかるじゃろう」

確かに骨の形が変わっていく。それと同時に全身の骨の間にノミを打ち込まれたような痛みが走る。

「続いて腹の中に、子宮と卵巣が作られる」

身体の奥底に、ぼっと熱い塊ができたような感じがする。それはみるみる大きくなり、ユリは内蔵に焼けるような痛みを味わった。

「ほうらもうおぬしは、外見的には女じゃ」

肩や脚から筋肉が消えていくのがわかる。その代わりに、胸や腰が柔らかい脂肪で包まれていく。乳首が大きくなるとともにびんと勃起し、張り詰めていくのがわかる。

「神経がだんだん女のものになっていく。心地良いじゃろう？」

わたし、生まれ変わっていく…ユリはそう思った。もう、自分のことを「俺」と呼ぼうとは思わない。「わたし」は「わたし」なのだ…。

「仕上げじゃ。膣が形成され、女性器が開く」

腹の中に宿った熱い塊…子宮から、さらに熱い棒のようなものが体外に出ていくような感じがする…その熱い棒が肛門のやや前のあたりを突き破る。なまくらな刀で斬られたような痛みが走る。

斬られた先端の部分に、また熱い塊のようなものが作られる…それはやがて冷えて固まっていき、異様なまでに鋭敏な器官へと変わった。

「ほうら、できた…何ができたか、自分の口で言ってみるがよい」

グリにこう言われた瞬間、「恥ずかしさ」が頭から「その部分」に向かって突き抜けていった。しかし同時に、乳首と股間の鋭敏な部分が快感に包まれる。できたばかりの膣が猛烈な勢いで悦びの液体を噴出させた。

「もう一度聞こう。おぬしの身体にできたのは、なんじゃ」

魔王グリは、ユリの身体にできたばかりの鋭敏な器官…クリトリスを指先で撫でながらそう言った。ペニスで感じていたのとは段違いの快感に身を振りつつ、ユリは言った。

「お、おマ○コですっ…わたしの身体に、おマ○コができたんですっ…！ああつ、だ、ダメっ」

そう言うと同時に、ユリは絶頂に達し、そのまま気絶した。